INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

INAX MUSEUMS

vol.52 DEC. 2020

特集 時空を超えるタイル
——「世界のタイル博物館」2階リフレッシュオープン

Feature Story
Tile: transcending time and space—Reopening of the Tile Museum's refurbished second floor

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER
vol.52 DEC.2020

CONTENTS

03 特集 時空を超えるタイル
—「世界のタイル博物館」2階リフレッシュオープン
Feature Story
Tile: transcending time and space
Reopening of the Tile Museum's refurbished second floor

04 タイル文化の交流

07 新しい展示のここも見て！
中国のタイル／諸国のタイル／タイルの裏が語る
ここも見どころ
山本コレクション紹介コーナー

09 Live Report 開催報告

REPORT 01 光るどろだんごオンラインコンテスト2020
2020 National online championship for shiny clay balls

10 REPORT 02 「おうちミュージアム」でライブミュージアムを楽しもう
Online programs to enjoy the INAX Museums

REPORT 03 旧郵船ビルディングのテラコッタが仲間入り
Acquisition of terracotta from the old Yusen Building

REPORT 04 オンラインあいちのたてもの博覧会2020
at 窯のある広場・資料館
Aichi Architecture Online Exposition 2020 at Kiln Plaza

11 REPORT 05 常滑市内の小学校との取り組み
Activities with elementary schools in Tokoname City

1 2 3

［表紙写真］

1 総合受付
（窯のある広場・資料館）
2 中国のタイル
3 ミュージアムショップ
（2・3とも 世界のタイル博物館）

ライブミュージアムに吹く風 Fresh perspectives at INAX MUSEUMS 9

スタッフからの便り

つないでいくもの
Passing on the legacy

古便器コレクション

博物館には、「歴史、芸術、民俗、産業などに関する資料を収集・保管し、それらを調査研究する」という役割があります。このミュージアムに今あるタイルの収蔵品の多くは、タイル研究家・山本正之さんが収集されたものですが、少しずつ新しいコレクションも増えています。歴史的建造物が取り壊される時に、それに付随したタイルやテラコッタを譲り受け、また古便器や土管の寄贈のお話があれば、受け取りにうかがう。取り壊されたらなくなってしまうものを、つくった人たちが込めた想いや、それを大切に使っていた人たちの想いと共にお預かりし展示します。見る人には、それらの宝ものから、培ってきた文化や技術、ものづくりの心を少しでも感じていただければと思います。そしてこの想いを次の世代に伝え、継承していくことが私たちの果たすべき役割なのだと思っています。

白坂 香奈子（学芸員）

The acquisition of decorative tiles, architectural terracotta, pottery toilets, stoneware pipes, and other objects from historical structures before their demolition has enabled the INAX Museums collection to grow steadily. Our exhibition is designed to convey a sense of the spirit, techniques, and attention to detail of the people who created them as well as the affections of those who used and treasured them. We believe it is our role to pass on this legacy to the next generation.

Kanako Shirasaka, Curator of INAX Museums

Feature Story

Tile: transcending time and space

Reopening of the Tile Museum's refurbished second floor Sat. Aug. 8, 2020

特集

時空を超えるタイル

「世界のタイル博物館」2階リフレッシュオープン

2020.8.8［土］

「世界のタイル博物館」は1991年、タイル研究家の山本正之さん（1920-2000）が
約6000点のタイルを常滑市に寄贈されたのに始まります。
それらのタイルをINAX（当時）が科学的に調査・分析し、その結果を共有するなかで
博物館の建設が具体化。1997年「世界のタイル博物館」としてオープンしました。
その後2007年にライブ感あふれる「体感体験型のミュージアム」をめざして
1階の展示を中心にリニューアル。今回は、それ以来の大規模改修になります。
「ただ鑑賞するだけではない、その地域の文化、使われ方、科学的裏づけもわかる特徴ある博物館を」。
山本さんのこの言葉にさらに寄り添った展示にするため、
タイルが使われた様子のわかる写真や、日・英での解説も充実させました。
新たな展示の見どころを担当スタッフがご紹介します。

1

2

3

←P.03

1. イランのタイル

11世紀に「青釉タイル」が登場すると、華やかなタイル装飾が宗教建築や宮殿建築を豊かに装飾するようになった。

2. エジプト・ファイアンスタイル

実物展示とともに、実際にどのように使用されていたかを写真で紹介している。

3. 多彩草花文チューブライニング風レリーフタイル（イギリス、19末-20世紀初）

1

1. 鮮明な赤色が特徴的なトルコ・イズニックのタイル。

2. 光り輝くラスター彩や、星や十字の形をしたタイルも、イスラーム タイルの特徴。

3. ガウディのタイル［新設］

建築家アントニ・ガウディ（1852-1926、スペイン）設計の邸宅「エル・カプリチョ（奇想館）」に使われた、ひまわりがモチーフの外装タイル。

4. スパニッシュ・マヨリカ

マヨリカ陶器は 17-18 世紀に技法発祥の地スペインに回帰し、明るい色彩の錫釉色絵タイルがつくられた。

2

3

4

タイル文化の交流

主任学芸員　後藤 泰男
Yasuo Goto

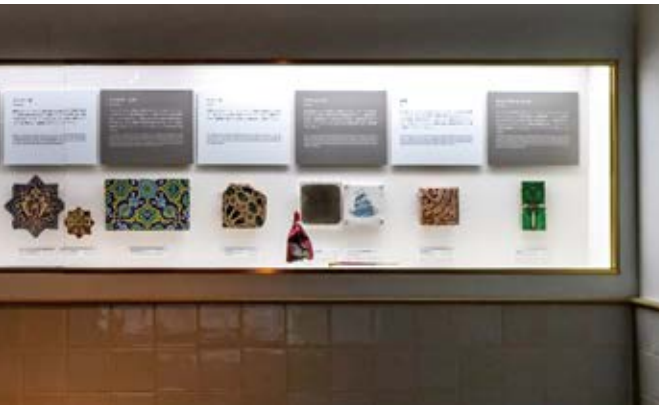
世界に広がったタイル

世界最古のタイルは、紀元前2650年の古代エジプトでピラミッドの地下空間の壁に使用されたタイル（P.03、写真2）だといわれています。青色の釉薬を使ったやきものです。当時タイルは宝石と同じように扱われ、復活を願う王の棺やマスクにも使われていました。それから現在まで4500年以上の時を経て、タイルは世界中に広がっていきました。行く先々で、その地域の建築や文化に影響を与えながら伝播していったのです。

タイルが、建物の耐久性を高めるという機能だけを重視するものであったなら、おそらくこれほどまでに広がらなかったし、他の素材に取って代えられていたでしょう。タイルには、建材としての有用性だけでなく、やきものとしての価値や装飾性があるからこそ永く使われ続けているのだと思います。今回のリニュアールでは、人間とともに世界中をダイナミックに、そして時間をかけて旅した「タイル」の歴史を改めて振り返ってみました。

北アフリカ経由でヨーロッパへ、さらに拡散するタイル

エジプトで生まれたタイルは、ペルシャ（現イラン）へ伝わり煉瓦建築の装飾手法として発達しました。さらに11～14世紀ごろのペルシャで発達したタイルは、イスラーム教の伝播と共に北アフリカ



5

5. 加飾技法［新設］

産業革命以前の、手づくりによるタイルの加飾技法を歴史順に並べている。一片のタイルからさまざまな生産技法の工夫、人の「手」の跡が見られる。

8. 9. 中国の空心塼［新設］

古代中国で地下に墓を築くのに用いられた。中は空洞で、長さは1mを超す大型のものが多い。側面に文字や人物、馬、樹木などが型押しで表現されている。

8

9

6. 中国の青花

14世紀末に景徳鎮で完成した「青花磁器」は、やがて「ブルー＆ホワイト」の名称で世界中の人々を魅了した。

7. 日本のタイル

明治末に近代窯業を学ぶ人たちが切り開いた新しい分野「美術タイル」（手前）、東南アジアへ輸出用につくられた和製マジョリカタイルも新たに展示に加わった。

6　7

のモロッコなどを経由して、スペインに渡りました。スペインのアルハンブラ宮殿に代表されるように、多くのイスラーム建築の壁や床を飾ります。15世紀末キリスト教の支配下となっても、タイル文化はヨーロッパ各地に広がります。

地中海のマヨルカ島を経由してイタリアに伝わった錫釉色絵陶器は、「マヨリカ陶器」と呼ばれ、イタリアの陶工たちはその技法と共に北上し、16世紀にはドイツ、フランスを経由してオランダで制作を行っています。

シルクロードを経て極東へ

紀元前２世紀ごろからユーラシア大陸の東西を結び、人やさまざまな物資が行き交った「シルクロード」もまた、タイル文化の交流に重要な役目を果たしました。サマルカンド（ウズベキスタン）などの中継都市には多彩なイスラーム建築があり、タイル装飾による建築や陶磁器製造の技術交流という意味でも重要な道でした。

イスラーム建築を飾る青色タイルの顔料の一つである酸化コバルトも、この道を通って中国に伝わりました。イスラームから来たコバルト顔料は中国では「回青」と呼ばれました。14世紀になると白くつややかな白磁にコバルトで彩画した「青花磁器」が完成し、景徳鎮などで最盛期を迎えます。17世紀には日本の有田にも伝わり、白地に青色のやきものは「染付磁器」と呼ばれて人気を博しました。

海のシルクロードを経てヨーロッパへ

重量のある陶磁器の運搬は、9世紀ごろから次第に海上ルートが主流になりました。時代が進み、16、17世紀の大航海時代になると、オランダの東インド会社は中国の青花磁器や日本の染付磁器を盛んにヨーロッパに持ち帰ります。ヨーロッパでは、この白地に青色の絵付がされたやきものを「Blue & White」と呼び、花瓶や壺を宮殿や自宅に飾りました。スエズ運河がまだない時代、ユーラシア大陸の極東からインド洋を経由してヨーロッパへやきものが伝播する長い

1

イギリスのタイル

1. ヴィクトリア時代を中心にイギリスで生産された「ヴィクトリアン・タイル」。多種多様な装飾表現と技術の近代化が特徴。

2.左　風景文イングリッシュ・デルフトタイル（18世紀）

オランダのタイル

3.マヨリカ陶器の流れをくむ白い錫釉下地に、子どもの遊び、市民の生活、風景や動植物などが素朴なタッチで描かれた。

2.右　白地藍彩風景文デルフトタイル（17-18世紀）

2

3

4

4.「タイル文化の交流」コーナー［新設］

5. ポルトガルの白地藍彩草花文タイル（18世紀）

6. 日本の染付花文本業敷瓦（19世紀）

5

6

道のりは、「海のシルクロード」とも呼ばれていました。

再び巡り会う、北アフリカ経由と極東経由のタイル文化

ペルシャから北アフリカ経由でスペインに渡り、16世紀にオランダに伝わった錫釉陶器は、同じペルシャから極東へと伝わり発展した白い磁器との出会いを果たします。当時、磁器を作る技術がなかったオランダ・デルフトの陶工は、白い錫釉下地にコバルト顔料で彩画したBlue & Whiteの「デルフトタイル」を生み出します。

このタイル製造技術は17世紀後半にはイギリスにも伝わり、イングリッシュ・デルフトタイルとして商品化されました。しかしオランダのものと遜色のない商品であっても、価格はオランダの半分にしかならなかったそうです。その反骨心もあって、イギリスは産業革命を経て、華やかなヴィクトリアンタイルを花開かせたとも言われています。

会場では、オランダとイギリスそれぞれのデルフトタイルを並べて展示しています（P06、写真2）。

展示を通して、気づいたこと（P06、写真4）

主要な国のタイルを地図上に置いて見ると、白地に青のタイルが非常に多いことに気づいていただけるでしょう。赤黒黄青緑と多彩な色合いを持つモロッコのカットワーク・モザイクタイルを中心に、白地に青のタイルが両側に広がっていく。意識してタイルを選んだのではありません。また、ポルトガルのタイル（左端P06、写真5）と、日本のタイル（右端P06、写真6）のデザインが、ほとんど同じだということも、展示してから気づきました。面白いですね。タイル文化が交流しながら世界中に広がっていった証拠でもあります。

ユーラシア大陸の全域を網羅した「時空を超えるタイル」の壮大な旅と、人々が織りなす物語に、思いを馳せていただけたらうれしいです。

新しい展示のここも見て！

1

中国のタイル

磯村 司
Tsukasa Isomura

囲碁を楽しんでいるのは「三清（写真1）」。道教の最高神格を持つ３人の神様で、その周りには、にぎやかな祝宴を盛り上げる幸せの仙人たち「八仙」が興味深げに集まっています。どんな風貌をしているの？ということで八仙一人ひとりをクローズアップした陶板も展示しました（写真2）。笛、瓢箪、鼓とそれぞれに持ち物が違うのも見どころです。

中国のタイルの特徴は単なる装飾ではなく物語があること。神様の話や、親孝行、忠義を諭す逸話など。今回はそんな物語のあるタイルを展示しました。どんな物語が描かれているか、じっくり見てください。

2

1. 青花陶板「三清囲碁図」（1465-1487（明・成化年間））
2. 赤絵釉上彩陶板「八仙」

3

4

諸国のタイル

白坂 香奈子
Kanako Shirasaka

コレクションの数が少なく、一つの国としてまとめられなかった国々のタイル。膨大なコレクションの中から、ハンガリーやドイツ、アメリカなど、“まだ見ぬ国” を見つけ出しました。ここで見てほしいのは「お国柄」です。ブルターニュ地方の民族衣装がかわいいフランスのタイル（写真4）。その国らしさが伝わってきます。個人的にはメキシコのほのぼのとした絵柄に癒されます（写真5）。かわいらしい動物柄も多く、写真を撮っている方も。素地の質感も多様なそれぞれのお国柄を感じて、お気に入りを見つけてください。

5

3. 褐色地多彩動物文瓦（ドイツ、14世紀）
4. 白地多彩人物文タイル（フランス、20世紀）
5. 多彩動物草花文タイル（メキシコ、20世紀）

6

タイルの裏が語る

立花 嘉乃
Yoshino Tachibana

「普段見ることができないタイルの裏をお見せしたい！」。これは、山本正之さんの思いを引き継いだ世界のタイル博物館のポリシー。今までもブランド名や商標が刻まれた裏側を展示してきました。さらに今回焦点を当てたのは、裏側に施された「技術的な工夫」。接着面の凸凹、縦筋や横筋、面取りなど、床や壁に張る商品として、いかに剥がれにくくするか、その工夫を見ることができます。また、立体感のあるレリーフタイルには、焼成時の変形や歪みを少なくするため、厚みを一定にする工夫がされています。表からはうかがい知れない情報が隠されている裏側に注目してください。

7

6. 多彩幾何文クエルダ・セカタイル（スペイン）（中央）
7. 多彩草花文レリーフタイル（不二見焼、20世紀前期）

ここも見どころ　山本コレクション紹介コーナー

世界のタイル博物館は、タイル研究家・山本正之氏（1920～2000）なくして語ることはできません。若き日からタイル収集と研究に邁進した山本さんは、タイルのルーツを求めて四大文明の地を訪れ、シルクロードを歩き、50か国以上をめぐり、一片のタイルがその国の風土や歴史、暮らしや文化を語ることを私たちに教えてくれました。

2020年は、山本正之さんの生誕100年にあたりました。

Tile: transcending time and space

Reopening of the Tile Museum's refurbished second floor *Sat. Aug. 8, 2020*

The story of the Tile Museum dates back to 1991, when tile researcher Masayuki Yamamoto (1920-2000) donated approximately 6,000 tiles collected from around the world to Tokoname City. INAX (presently LIXIL) undertook a scientific survey and analysis of those tiles. The company shared its findings with Tokoname City as well as Yamamoto and subsequently drew up plans to construct a museum. The Tile Museum was opened in 1997.
In 2007, the museum was refurbished mainly on the first floor, and reopened as a hands-on experiential museum. This is its second large-scale renovation.
Yamamoto had expressed a wish for a "unique museum that would showcase the local culture, describe how the tiles were used, and provide scientific evidence rather than be a place just for appreciation." Hoping to move closer to realizing his vision, we added photos showing how the tiles were used and provided detailed explanations in both Japanese and English. Some of the highlights of the new exhibition are described below by staff in charge of each of these sections.

Tiles as a catalyst for cultural interactions

Yasuo Goto, Chief curator of the INAX Museums

The spread of tiles across the world

The oldest tiles in the world are said to be those used on the walls of the subterranean passages of the pyramids of Egypt around 2650 BC. The tiles were made from sand, covered with a blue glaze, and fired. At the time, tiles were precious commodities that were used to decorate pharaohs' caskets and masks. In the 4,500 years since then, tile production and techniques have spread throughout the world, adapting to and influencing the architecture and culture of their new homelands.
If the only role of tiles were to enhance the durability of structures, they likely would not have been adopted by countries around the world but instead would have been replaced by another material. It was their beauty as pottery and ornaments in addition to their functionality as a building material that paved the way for their spread across the globe through the ages.

From Egypt to Europe by way of north Africa

The tiles produced in Egypt eventually reached Persia and evolved into decorations for brick structures. Later on, from the eleventh to fourteenth centuries, Persian tiles were brought to Spain via Morocco in north Africa with the spread of Islam. The tiles were a feature of the walls and floors of Islamic structures in Spain, most notably the Alhambra palace. Tile culture continued to spread and evolve throughout Europe even after Christianity assumed dominance in the late fifteenth century.

The Silk Road journey to the Far East

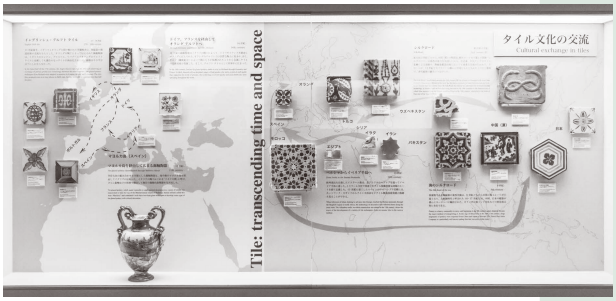
Since the second century BC, the movement of people and goods between western and eastern Eurasia took place along what came to be known as the Silk Road. These trade routes played a significant role in the spread of tiles. Samarkand in Uzbekistan and other major cities along the Silk Road had a diverse range of Islamic architecture and served as hubs for technical exchange for architectural styles using tiles and ceramic production.
It was on the Silk Road that cobalt oxide, used as a pigment for the ornamental blue tiles of Islamic structures, reached China. By the fourteenth century, the techniques for producing a translucent white porcelain decorated with cobalt pigment were perfected. This porcelain, known as "blue-and-white porcelain," thrived in and around Jingdezhen. In the seventeenth century, this porcelain reached the town of Arita in Japan, production got underway, and "sometsuke" porcelain, as it came to be known, gained widespread popularity.

To Europe via the Maritime Silk Road

Because ceramic pieces were so heavy, shipping routes became a mainstay of transportation beginning in the ninth century. Later long voyages became possible, and in the sixteenth century long-distance sea trade routes were established. The Dutch East India Company brought huge quantities of blue-and-white porcelain from China and Japan to Europe in the seventeenth century, and these vases and jars adorned palaces and estates. The long sea routes along which these pieces traveled from the Far East to Europe was called the Maritime Silk Road.

Revelations from the display

The infographic below of tiles produced in countries around the world show the predominance of blue-and-white tiles. I also found that the design of the tiles from Portugal (far left) and Japan (far right) look very much alike. They were interesting discoveries that attest to the global movement and evolution of tile production and techniques.
It is my hope that the exhibition will let viewers visualize the great journey across Asia and Europe of these tiles, which transcend time and space, and the stories of the people whose lives were touched by these tiles.



Check these out, too!

Tiles from China Tsukasa Isomura
Chinese tiles tell a story and are not just decorative pieces. They depict myths, lessons of filial piety, loyalty, and devotion. Enjoy the tales conveyed by these tiles.

Tiles from various countries Kanako Shirasaka
Our exhibition features tiles from Hungary, Germany, the United States, and other countries on display for the first time. The tiles, which were uncovered in our extensive collection, reflect the culture of the country from which they came.

What the back of the tiles tells us Yoshino Tachibana
Take a close look at the details of the design on the back of the tiles. How were tiles designed so they would not become detached from the floor and walls? What techniques were used to ensure that the three-dimensional relief tiles were fired evenly?

Renovation of the Yamamoto Collection Corner
To mark the one hundredth anniversary of the birth of Masayuki Yamamoto in 2020, we made a new section that introduces his life and lifework.

Report 01

光るどろだんごオンラインコンテスト2020

2020 National online championship for shiny clay balls

2020.7.21 Tue.- 9.4 Fri.　結果発表 2020.10.8 Thu.

新型コロナウイルス感染症対策をふまえ、初めてのオンラインによる光るどろだんご全国大会を開催しました。制作会場は参加者のご自宅等です。そのため、オンラインショップでご購入いただく初の「光るどろだんごキット」をご用意いたしました。

各自各場所で全行程の「削り・色付け・磨き」をし、作品を完成させる、しかも時間制限もなく、家族などサポーターのお手伝いもOKというのが今回の特徴です。審査は、参加者から送られた完成品の画像と制作にまつわるストーリーをもとに行われました。

時間をかけて丁寧に磨きこまれた応募作品からは、「ものづくり」への思いや執念が伝わってきて、審査員一同驚きの連続でした。全国18都府県、そして2歳から79歳まで多彩な世代から参加者が集まったのもオンラインならではです。

応募総数158点の中から一次審査で30点を選出し、本審査で10点の入賞作品を決定しました。「審査員一同、送られた写真とコメントをしっかり拝見し、悩みながら審査しました。皆様がご自宅で、どろだんごを通してご家族と楽しい時間を過ごされたこともわかり、うれしく思いました」と、歴代の大会審査委員長・三木きよ子さん（土絵作家）。

コロナ禍という未曽有のアクシデントの中で、新しい発見や体験が生まれ、喜びと感動に包まれたオンラインコンテストでした。

As a countermeasure against COVID-19, the national championship for shiny clay balls was held online for the first time this year. Participants submitted photos and stories of polished clay balls they made from special kits purchased for the event. All of the works were outstanding, reflecting a great commitment of time and effort.

三木きよ子 審査員長賞

津幡 美香さん 富山県 **のストーリー「鉄 壁」**

完璧な球体、完璧な漆黒。完成に至るまで1カ月かかりました。少しの凹みも許さず丁寧に丁寧に磨き込み、漆黒になるまで赤、青、緑、白を薄く薄く塗り込んでは磨いてを繰り返しました。傑作です。

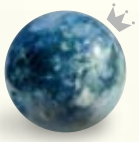
三木先生の講評

作り出す工程を見る事のできないコンテストですが、「時間制限なし」の応募ルールにそって、1カ月かけて丁寧に削り出した、その努力を仕上がったどろだんごが静かに物語っています。どろだんごに注ぐ情熱は、しっかりと伝わってきました。まさに鉄壁の満点のどろだんごで、感動致しました。（一部略）

＼光るどろだんごキット／

どろだんごタネ、4色の化粧どろ、磨きの道具などをセットに。期間限定で、LIXIL公式オンラインショップで販売中。

セントレア賞



田中 志奈さん
愛知県
「水面と睡蓮」

LIXIL賞

木村 美咲子さん
東京都
「かおかおかお」

INAX ライブミュージアム賞

井田 梨紗子さん
東京都
「おばあちゃんのスイカ」

タイトル賞

澤田 将文さん
栃木県
「土と炎」

ストーリー賞

加藤浩道さん 愛知県 **のストーリー「勇気の玉」**

勇気をくれた「光るどろだんご」です。私は昔から手先が器用ではなく、ずっと細かいものづくりは避けてきましたが、今回、知人の勧めで「どろだんごづくり」にチャレンジすることに。作業中、感動しました。ちゃんと丸くなっていくし、光り出したのですから。私にもものづくりができるうれしさがこみあげました。やってよかった。小さな勇気を持つことができたから。デザインは泥の黒色を生かす事を考えて決めました。

三木先生の講評

初めて“どろだんご”づくりに挑戦され、その思いを綴られたストーリーに感動を覚えました。ぜひ2個目、3個目とつくり続けて“どろだんご”の奥深さにハマってください！

そのほかのストーリーは下記サイトでごらんいただけます。

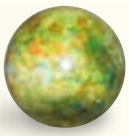
https://livingculture.lixil.com/clayworks/clayworksentry/2020/

特別賞

太田 彩葉さん
愛知県
「ペルセウス流星群」

山田 秀紀さん
愛知県
「夕暮れのヤモリ」

中野 邦彦さん
東京都
「芽吹き そして再生へ」



片山 千明さん
兵庫県
「池の睡蓮」

素材の持ち味を活かした料理を提供する

pizzeria la fornace

ピッツェリア ラ・フォルナーチェ

Cuisine that captures the full flavor of the ingredients

●ピッツァ　カルネミスト
●パスタ　アンチョビと玉ねぎのモッリーカ添え

イタリア産の2種のサラミを盛り合わせ、唐辛子を効かせたトマトソースピッツァと、玉ねぎが奥深い味わいのオイルベースのパスタ。「モッリーカ」は細かいパン粉をオリーブオイルで炒めたもので、シチリアでよく使われる仕上げ。どちらもワインと相性の良い大人の味です。

Lunch time:　11:00-14:30 L.O.
Café time:　10:00-11:00,14:30-17:15 L.O.
Dinner time:　土・日・祝日 17:30-20:00 L.O.
水曜日休（祝日は営業）TEL0569-34-8266

Report 02

「おうちミュージアム」で ライブミュージアムを楽しもう

Online programs to enjoy the INAX Museums

新型コロナウイルスの影響で休校が続いた中、ご家庭でライブミュージアムのコンテンツを楽しく学んでいただくプログラムをウエブサイトで提供しました。

第1弾は「タイルぬりえ」。世界のタイル博物館のコレクションであるカラフルな和製マジョリカタイル柄をぬりえにして楽しんでいただきました。第2弾は「折り紙けんちく 常滑まちあるきシリーズ」。「窯のある広場・資料館」「登り窯」「一木橋」「土管坂」などの型紙を提供。歴史ある建物を手のひらサイズの折り紙建築で再現できて、大人も夢中になるプログラムです。インスタグラムに力作も投稿されました。これらのコンテンツは今もウエブサイトで公開しています。ぜひ挑戦してみてください。

https://livingculture.lixil.com/topics/ilm/inax-1/

登り窯

窯のある広場・資料館

とこなめ陶の森陶芸研究所

一木橋

土管坂

＊「おうちミュージアム」は、北海道博物館が休校中の子どもたちに提供するプログラムとして始めた取り組み。各地のミュージアムと連携しています。
＊折り紙けんちくの制作はteam折り紙建築・筧清澄＋村瀬良太。愛知県内の歴史的な建造物を対象にしたワークショップを通して都市・地域・まちなみを考える活動をしています。

While schools and colleges were still closed due to the effects of COVID 19, the INAX Museums created online activities to deepen interest in and understanding of its collection, including coloring pages of tile patterns from its collections and paper patterns for recreating historical structures of Tokoname.

Report 03

旧郵船ビルディングの テラコッタが仲間入り

Acquisition of terracotta from the old Yusen Building

2020.7
建築陶器のはじまり館 テラコッタパーク

日本郵船株式会社様から寄贈された旧郵船ビルディング（1923（大正12）年竣工、1975（昭和50）年解体）のテラコッタ2基がテラコッタパークに設置されました。洋風建築が建ち並ぶ東京・丸の内のオフィス街に建てられた郵船ビル。その外壁を飾ったアメリカ製のテラコッタは日本の建築史に残るモニュメントです。ぜひ間近でごらんください。

The old Yusen Building was completed in the Marunouchi district of Tokyo in 1923. Two American-made terracotta pieces that adorned its façade have been installed in Terracotta Park.

Report 04

オンラインあいちのたてもの博覧会2020 at 窯のある広場･資料館

Aichi Architecture Online Exposition 2020 at Kiln Plaza

2020.11.14 Sat.

愛知県国登録有形文化財保有者の会が主催する「あいちのたてもの博覧会」がオンラインで開催され、窯のある広場・資料館もライブ配信で参加しました。

オープニングは土管の中から（写真）。100年前に建てられた工場は、昭和半ばまで上下水道整備に不可欠であった土管を生産し、日本の経済成長を縁の下で支えてきました。その「ものづくりの熱」を次の世代に伝えていきたいと、3年間かけて行った大規模な保全工事の様子を中心に紹介（保全工事の詳細は本誌vol.50参照）。道具、作り方、土管の種類、当時の常滑の町の様子など、視聴者からの質問も交えながら、リアルタイムで建物の魅力を配信。その様子は、YouTubeでご覧いただけます。

https://www.youtube.com/channel/UCsEQAW8ruO6oauY1SzYU_9Q

A live report of the Kiln Plaza was submitted as the entry for Aichi Architecture Exposition, which was online this year. The report explored the three-year preservation project of the Kiln Plaza in the aim of conveying the enthusiasm of manufacturing and inspiring the next generation.

Report 05

常滑市内の小学校との取り組み

Activities with elementary schools in Tokoname City

常滑市の各小学校で実施されている総合的学習。常滑西小学校の3年生が学ぶのは「常滑のやきもの」。その“先生”として当館主任学芸員の後藤泰男が出前授業を行いました。授業のテーマは「機械でつくるやきものたち」。土管、衛生陶器、タイルなど、手づくりの時代から工業製品として大量につくられ、常滑を代表する産業となった道のりを、クイズを交えながら紹介しました。

ライブミュージアムは、教育の場としてさまざまに活用いただいています。コロナ禍のなか常滑東小学校3年生は1クラスずつ5日間、ミュージアムを見学。事前学習でしっかり予習した生徒たちは、マナーよく博物館という場を体験していました。また大野小学校では創立60周年を記念してモザイクタイル画を生徒たちが制作中で、その施工のお手伝いもしています。これからも地域とのつながりを深めていきたいと思っています。

INAX Museums staff visit elementary schools to teach classes about pottery and Tokoname. The museum also provides field trips for schoolchildren and cooperation for the creation of mosaic murals made out of tiles and other initiatives to strengthen ties with local schools.

光るどろだんご Shiny Clay Ball Workshop

冬のテーマ「アイスブルー」
The new color for winter : Ice Blue
～2021.2.28 Sun. ［予約制］

冬の海と聞くと暗い色を想像される方が多いと思いますが、実は透明度が高くとても美しいことがよくあります。海水温が下がり、プランクトンが減少するためです。

そんな冬の海をイメージした青色です。名付けて“アイスブルー”透明感のある冬の海をだんごで表現してみましょう。

料　金：900円／個（税込）
お問合せ・ご予約：web、お電話 TEL0569-34-6858
または「土・どろんこ館」受付まで
＊2021年3月から、春のテーマが登場します。お楽しみに!

陶楽工房 Tiling Workshop

新メニュー「グランツ・モザイク」
A new program : Glanz Mosaic
［予約制］

輝き、きらめきという意味が込められた「グランツ Glanz（ドイツ語）」。当館のタイル好きスタッフが考案した、タイル選びも楽しい新メニューです。その名のとおり、形、色、艶、さまざまなタイルを使って、卓上ミラーやコーヒータイムのボードなど、生活を彩るオリジナル・アイテムを作りましょう。

料　金：2,800円／1セット（税込）
サイズ：20cm×20cm
定　員：各回5名
お問合せ・ご予約：web、お電話TEL0569-34-6858

MUSEUM SHOP
ミュージアムショップ

佳窯（けいがま）
切立盤、カップ＆ソーサー
KEIGAMA
rimmed plates; cup and saucer

料理が映える器、常滑発の「盤（ばん）プロジェクト」。知多半島に古くから伝わる原料「チャラ」や「牡蠣殻」を使ったシンプルながらも個性的なデザイン。素朴な海辺の町の風を感じる常滑焼を食卓でお愉しみください。

切立盤15.5cm　3,500円（税別）　21cm　4,500円（税別）
カップ＆ソーサー 5,200円（税別）

かまわぬ
窯のてぬぐい（新作）
KAMAWANU
KILN PLAZA TENUGUI
(hand towel)

「窯のある広場・資料館」リニューアルオープン1周年記念の注染（ちゅうせん）手ぬぐい。新ロゴをモチーフにした煙突の絵柄のオリジナルデザインです。「代官山かまわぬ」謹製。　1,200円（税別）

憲児陶苑（けんじとうえん）
鎌倉彫マグカップ
KENJITOUEN
KAMAKURA-BORI mugs

色陶土をひとつずつ削って施された鎌倉彫り模様。モダンな中にも落ち着いた手仕事を感じさせる常滑焼のマグカップです。スモーキーなトーンはどんな食器とも相性が良く、食卓に馴染みます。

3,200円～（税別）

ショッパー
Museum's original shopping bags

「窯のある広場・資料館」のロゴマークをデザイン化したミュージアムショップ・オリジナルショッパー（紙袋）。持ち手はライブミュージアムのイメージカラーを意識した赤・水色・土色（3色）。ギフトシーンを華やかに演出します。

S・M　50円（税込）L 100円（税込）

ミュージアムショップの商品を
オンラインサイトにて
ご購入いただけるようになりました。
https://www.care-goods.lixil-online.com/house/ilm/

INAXライブミュージアム NEWS LETTER vol.52　編集：編集企画室 群　デザイン：三矢千穂　印刷：凸版印刷株式会社

museum collection

ミュージアムコレクション

52

ハンガリー国立応用美術館 外壁用タイル

Exterior tiles used for
the Museum of Applied Arts in Budapest, Hungary

19世紀末から20世紀初めにかけて、ヨーロッパ各国の建築・工芸・絵画などにおける花やツタなど植物を模した曲線的な装飾様式のことをアールヌーボー様式と呼び、この様式建築を世紀末建築と呼ぶことも多くあります。今回ご紹介するタイルは、ハンガリーの首都ブダペストに1893～96年に建てられた、ハンガリー国立応用美術館の外壁に使用されていたものです。建築家は、ハンガリー建築界の巨匠レヒネル・エデン。彼は、ハンガリー南部の小さな街ペーチュに1853年にやきもの工房として誕生したジョルナイ工房で作られるタイルを好んで使用しました。ジョルナイ工房では、高温焼成による品質の優れた外装用タイルやテラコッタを独特な曲線とカラフルな光沢をもつ釉薬を用いてデザインしました。

1

2

1. 国立応用美術館
2. メインファサードの装飾タイル
©Museum of Applied Arts, Budapest

イギリスで18世紀後半に始まる産業革命の波が、19世紀末にようやくハンガリーに到達し、爆発的な経済発展をする首都ブダペストの人たちは、来るべき20世紀への期待と希望をもって、新しくできた国立美術館の外壁を彩るこのタイルを見上げていたに違いありません。

These tiles, distinguished by their unique curves and colorful glazes, graced the outer walls of the Museum of Applied Arts in the Hungarian capital of Budapest. The museum, completed in 1896, was designed by the eminent Hungarian architect Ödön Lechner, and the tiles were produced by the Zsolnay Porcelain Manufactory in a small town in southern Hungary.

資料名：「白地多彩草花文（フォークロアの花）レリーフ＆チューブライニングタイル」
●サイズ：600×520×70 mm（4枚セット）　●製作：ジョルナイ工房（ハンガリー）　●年代：1895-96年

＊INAXライブミュージアムはLIXILが運営する文化施設です。 ＊INAX MUSEUMS is operated by LIXIL Corporation.

INAX ライブミュージアム

〒479-8586
愛知県常滑市奥栄町1-130
TEL.0569-34-8282　FAX.0569-34-8283
https://livingculture.lixil.com/ilm/

開館時間――10:00am～5:00pm（入館は4:30pmまで）
休館日――水曜日（祝日の場合は開館）、年末年始
共通入館料――一般：700円、高・大学生：500円
小・中学生：250円（税込、各種割引あり）
交通――<バス>
●名鉄線「常滑駅」または中部国際空港より
知多バス「知多半田駅」行き
「INAXライブミュージアム前」下車徒歩2分
<お車>
●名鉄線「常滑駅」より約6分
●中部国際空港より約10分
（セントレアライン「りんくうIC」降りる）
●知多半島道路「半田IC」より約15分
●セントレアライン「常滑IC」より約7分
（乗用車・バス駐車場完備）

INAX MUSEUMS

1-130 Okuei-cho, Tokoname-shi,
Aichi Prefecture 479-8586 Japan
https://livingculture.lixil.com/en/ilm/

Hours:
Open (Museum & Shop): 10:00-17:00
(Last entry:16:30)
Closed: Wednesdays (Open if the Wednesday is a public holiday), New Year holidays

Admission Fee (tax inc.):
Adults ¥700
High school and college students ¥500
Elementary and junior high school students ¥250

Access
By Bus:
From Meitetsu Tokoname Station or Centrair Central Japan International Airport, take Chita Bus bound for "Chita Handa Station". Get off at "INAX Live Museum-mae". Two-minute walk from bus stop.

LIVING CULTURE

INAXライブミュージアム NEWS LETTER vol.52 2020 | 2020年12月30日発行　発行・編集人　尾之内 明美

9 0 1 2 0 7 9 6 6 1

カ-29-51 2020.12.30